

泗沘都城の築造は扶蘇山城東門址付近から出土した「大通」銘印刻瓦、定林寺造成土層出土の三足器、最近発掘された東羅城盛土層出土の三足器、そして宮南池北側道路遺構の周辺水路から出土した三足器などの資料から、遷都年である538年より前に完成していたものと判断される。高句麗の長安城より時期的に先行し、中国南朝の歴代都城があった建康都に羅城がなかった点などを考えると、羅城で都市空間を防護する新たな形態の泗沘都城は、漢城期以来の都城変遷過程において摸索された独創性豊かなものと理解できる。

## 【コメント】

亀田 修一

まず、朴淳発先生の最新のお話を伺い、泗沘都城研究が大いに進んでいることがわかりました。ありがとうございました。以下ご発表の順に沿って述べていきます。

まず、Ⅱの羅城の平面形と築造技法ですが、最も印象に残り、気になった点は「西羅城が初めから存在しなかった」とおっしゃったことです。実際に数カ所発掘調査をされた成果をもとにおっしゃっておられますので、とても重たいご意見だと思います。ただ、扶蘇山城の西門の北側に西に延びる土塁線があったように記憶しております。朴先生もその近くは調査されているようですが、土塁本体の断ち割りもされたのでしょうか。また、扶余の町の北西部、旧校里付近には自然の丘陵状のものがあつたと記憶しております。発掘調査の成果として、人工的な痕跡が確認されていないようですが、自然丘陵の加工や柵程度の施設を考慮することも難しいのでしょうか。西羅城が扶蘇山城に接する部分から存在しないと、確かに主に攻撃される方向は北東側だとしても、錦江を利用して少し扶蘇山を西に回り込めば、クドゥレの方から攻撃されやすいのではないのでしょうか。せめて旧校里近くまでは城壁、または何らかの防御施設があるほうがわかりやすいのではないのでしょうか。

また王宮の中心部は未だみつかっていないようですが、亀田はこれまで発掘調査された場所の東側で「大唐」銘軒丸瓦や方形の礎石などが出土したところがあり、この付近が王宮中心部ではないかと考えています。「大唐」銘軒丸瓦は唐が百済を滅ぼしたあとに駐屯した場所で使われた可能性があるのではないかと考えているからです。

次に、東羅城ですが、近年の調査でかなり詳しくわかってきたと思います。城壁の構築技法は先生もふれられていますが、特に低地帯での枝や木の葉などを使用した方法は、日本の堤防（弥生時代後期の岡山県上東遺跡の港の堤防、616年頃の大阪府狭山池の堤防など）や城壁（664年の福岡県水城）などの構築技法の研究に大いに役立っています。

Ⅲの都城内の空間区画ですが、GPSを使われ、タテ113.1m×ヨコ95.5mの長方形区画が基準と考えられ、溝を含めた幅が約10mの大路と約5.5mの小路があることなどを明らかにされ、今後の泗沘都城における区画研究のまさに基礎となる仕事だと思います。町中の調査は難しいとは思いますが、今後の着実な発掘調査データの増加が期待されます。

ところで朴淳発先生は条坊制という言葉は使われていないようですが、扶余の町の東側にあ

る錦城山などの自然地形との関わりを意識されて使われなかったのでしょうか。低湿地などの不便な土地に関しては、水田利用などをお考えのようですが、東側の高い場所については道路など、どの程度及んでいたとお考えでしょうか。

最後に、Ⅳの築造時期についてです。東城王12（490）年などの泗沘での狩猟記事、扶蘇山城の「大通」銘瓦による527年創建の大通寺との関わりでの扶蘇山城築城時期の推測、東羅城土築部分や定林寺造成土出土の三足土器が6世紀前半に推測されることなどの資料を基に「泗沘都城の完成は遷都時期である聖王16（538）年を下限」とすると述べています。確かに武寧王陵使用埴（壬辰[512]年）などが泗沘都城北東側の井洞里窯跡群で焼成されており、538年の遷都までにいろいろな工事などが泗沘で行われていたことは間違いないと思われます。ただ「完成」という言葉をお使いですが、道路・排水溝の可能な範囲の敷設、宮殿・官衙などの建物の造営、扶蘇山城や羅城の城壁および関連施設の造営など、どの程度の施設の造営をもって「完成」とお考えなのか教えていただければ幸いです。

以上、理解が不十分でおかしな質問もあろうかと思いますが、よろしくお願いいたします。

（岡山理科大学総合情報学部）